

チャレンジしてこそ変化も可能に、 どんな危機に遭遇しても道は必ずある！

株式会社イシワタグラフィックス 代表取締役 藤澤克彦氏

写真植字業の家業を受け継いだものの、時代の変化にのみ込まれて業界自体が消滅の危機に。自分が歩もうとする道に逃げ場はなく、行く先にひとすじの灯りも見当たらない…。そんな状況からチャレンジを繰り返すことで独自に活路を見出してきた、「株式会社イシワタグラフィックス」の藤澤克彦代表取締役社長を訪ねました。



■デジタル化という名の時代の波

どんな時代も順風満帆とは言えませんが、過去に経験した最も大きな危機は何かと尋ねられたら「業界存続の危機」とお答えします。私が26歳で父から受け継いだ時点ですでに、家業である写真植字業そのものが消滅の危機に瀕していました。これまでにやってきたことが通用しなくなるという状況に、一時は廃業まで考えました。



■“気持ち伝わる”デザインを追求

もちろん、合併＝安泰ではありませんでした。企業としての興りも過去の歩みも異なる2つの会社がひとつの組織を形成するのです。正直、やり方・考え方の違いに当初は戸惑いました。けれども、何を目指しどこへ行くのかを固め、それを全社員で共有しなければ足並みは揃いません。社員の負担にならない程度に個別に話す機会をつくり、素直な意見を聞き出しながら会社としての方向性を定めるように努めました。さらに、年4回の全体会議は現在も続けています。そんな当社が現在大切にしているのは、使う方への思いやり、お客様の想いが伝わるデザインの重視と追求、そして長く手元に残していただける形ある物をつくり出すことへのこだわりです。



■フル回転の日々の後に合併を決断

とは言え、父が大切に築いた家業を失いたくはありません。学生時代にグラフィックデザインを多少学んでいたため、手探りでデザイン・印刷等を請け負って会社運営を続けました。人を雇う余裕はなく、自身が4番兼ピッチャー兼監督を務めるような多忙な日々でした。一方、家業の製版業を受け継いだ妻（当時は結婚前）もまた、業界消滅の危機に苦しんでいました。相談し合える心強さはありませんでしたが、状況を好転させられるような策を見出すことはできず…約10年踏ん張った後に、思い切ってデザインとweb制作を専門とする妻の会社との合併を決断しました。こうして現在の「株式会社イシワタグラフィックス」として歩み始めることになったのです。



■あの苦しい時期がなければ今もない

今後も同じように業界自体がなくなる危機が訪れないとも限りません。でも、一度乗り越えた経験があるからか、挑戦と変化を恐れずに進めば必ず道はあると言えます。そして、「今の私や会社は、あの大きな波を経験したからこそ存在する。苦しい時は強くなるチャンスでもある」という教訓を胸に、この先も前進し続けたいです。

「社員と一緒に『お客様の満足のため、当社にできること・当社にしかできないこととは?』と考える。そのチャンスをもらえること自体がありがたいですね」。感謝と挑戦の心を大切にする藤澤さんの姿勢には、誰にとっても原点となり得る真っ直ぐな教えが詰まっている。

藤澤克彦氏(ふじさわ・かつひこ)
株式会社イシワタグラフィックス
代表取締役社長

長野市生まれ。23歳で実家の写真植字業に入り、26歳で代表を引き継ぐ。2007(平成19)年の合併と同時に同社の代表取締役社長に就任。現在に至る。



次回は、有限会社Bee's 松井理恵さんです